

## ブラーフミー文字で音注を附した漢文經典について<sup>1</sup>

### —北大 D020 『金剛般若波羅蜜經』—

武内 康則

#### 1. はじめに

敦煌やトルファンからは、チベット文字、ウイグル文字、ソグド文字、そしてブラーフミー文字によって漢字音を音写した文献が発見され、それらに反映される8-10世紀の西北方言の漢字音が研究されてきた<sup>2</sup>。

北京大学図書館に所蔵される敦煌文献には、ブラーフミー文字で漢字に音注を附した漢文經典が存在するが、いまだに十分研究されていないようである。本稿では、その内容の概略を述べ、他の資料に見られるブラーフミー文字による漢字音転写や、チベット文字などによって転写された同時代の漢字音と比較し、音注に対して考察を加えたい。

#### 2. 資料について

本稿で扱う資料は、北京大学図書館に所蔵されている敦煌文献「北大 D020」であり、『北京大学図書館蔵 敦煌文献①』 pp. 81-82 に図版が収録されている<sup>3</sup>。同書によ

---

<sup>1</sup> 本稿執筆に際しては、ナポリ東洋大学の Mauro Maggi 教授に筆者のブラーフミー文字の翻字を確認・修正していただき、発音の表記法に関して貴重なコメントを頂いた。また、査読者の方々からも有益なコメントを頂いた。この場を借りて感謝の意を表したい。言うまでもなく本稿における誤りや不備はすべて筆者の責任である。

<sup>2</sup> チベット文字資料に見られる漢字音に関しては、羅(1933)、高田(1988b, 2005)、周・謝(2006)らによる研究がある。ウイグル文字資料については庄垣内(1986, 2003)らの研究がある。ソグド文字資料については吉田(1994)の研究がある。ブラーフミー文字資料については4節を参照されたい。

<sup>3</sup> 北京大学図書館・上海古籍出版社 編(1995)『北京大学図書館蔵 敦煌文献①』上海: 上海古籍出版社。

ると、北大 D020 は 3 枚の黄麻紙からなり、全体のサイズは高さ 27.5cm、幅 97cm である。漢字漢文 50 行が残されており、その内容は鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜經』(『大正新修大藏經』 Vol.8 No.235 pp. 749c 1.17-750b 1.13)に相当する。

高田(1988a: 71)によると、敦煌出土のコータン語の文献は、当時敦煌を支配していた帰義軍節度使政権とコータン王国の王家の姻戚関係をもとにした同盟関係を背景としており、このような姻戚関係による緊密な関係は 10 世紀になってからのものである。したがって、北大 D020 の音注が書かれた年代は、他の敦煌出土のコータン語の文献と同じく 10 世紀と考えられる。

### 3. テキスト

北大 D020 には、所々に以下のように漢字の音注が附されている。



1.16.3 偈 khī'

音注に使用されるのはコータン語の文献に見られる西域南道のブラーフミー文字の草書体である。図版は鮮明とは言い難く、判読が困難な文字も見られる<sup>4</sup>。

以下に音注の翻字を示す<sup>5</sup>。なお、文字の下に示される鉤形の補助記号はアポストロフィー(')によって転写する。

1.4	莊	嚴	
	kṣām'	gim	
1.5	清	淨	
	tsyem	tsyem	
1.6	觸		
	chuhä		
1.9	恒	河	
	hiṃgä	ha'	
1.10	河	恒	河
	ha'	higa	ha

<sup>4</sup> 1.19 「受」、1.23 「奉」、1.24 「奉」、1.40 「就」、1.48 「驚」は判読が困難であった。本稿では Maggi 教授の御教示に従いこれらの翻字を行った。

<sup>5</sup> ( ) はテキストが不鮮明であることを示している。[ ] は破損したテキストの復元を示している。

1.11	尚	況							
	sāmtām	hvi(ā)ʼ							
1.12	今								
	kimʼmä								
1.13	滿	爾	恒	沙	數				
	bamnä	śiʼ	hiṅga	ṣṣa	ṣṣū				
1.15	受	持							
	sū	chī							
1.16	偈	勝	前						
	khīʼ	śem	tsyim(n)ä						
1.17	次	隨	偈						
	tsi	svi	khīʼ						
1.18	脩	羅	供	養	塔				
	syū	la	kūṃ	yāmtām	thabā				
1.19	廟	況	盡	受	持	讀	誦		
	byau	hviāʼ	tsyimnä	sūtū	chī	thu	syūṃ		
1.20	成	就	最	希	典				
	śem	tsyūtū	tcuai	hiʼ	ttiṃnä				
1.21	處	重							
	sū	chūṃ							
1.23	奉								
	hvūmtūṃ								
1.24	蜜	奉	持						
	birā	hvūmtūṃ	chī						
1.25	蜜								
	birā								
1.28	微	塵							
	vī	tsva chimna <sup>6</sup>							
1.29	微	塵							
	vī	chimna							
1.30	微	塵							
	vī	jiṃnä							
1.34	命								
	memʼ								
1.36	深	解	義	趣	涕	淚	悲	泣	
	śimmā	haiʼ	giʼ	tsyū	thyai	lvī	piʼ	khi(?)bā	
1.37	希	深	典						
	hiʼ	śimmā	ttyimna						
1.38	從	昔	慧	眼	未				
	tsyūṃ	syi	hvyai	gamʼnä	vī				

<sup>6</sup> 1.28「塵」には tsva chimna の音注がある。Maggi 教授には、tsva がコータン語では“gone; went”を意味することから意味に言及したのではないかとのコメントを頂いた。しかし、本稿では tsva は「塵」を字形が似ている「座」と誤解したことによる表記であると考えたい。したがって、漢字音の特徴を検討する際には tsva を漢字音「座」の転写として扱う。

1.39	信	清	淨			
	simn(ä)	tsyem	DITTO <sup>7</sup>			
1.40	成	就	希			
	sem	tsyütü	hi'			
1.42	典	信	解	受	持	難
	tüm	simnä	kai'	sü	chī	damnä
1.43	解	受	持			
	kai'	sü	chī			
1.44	希					
	hi'					
1.46	離					
	li					
1.48	驚	畏				
	khyütü	vüi				
1.49	希					
	hi'					
1.50	忍					
	simna					
1.51	[辱]					
	[š]u'ha <sup>8</sup>					

ここで、北大 D020 に見られる音注の特徴についてまとめておきたい。

北大 D020 では、あわせて 95 の漢字に音注が附されている。これらには、同じ漢字に対する音注も含まれているので、それらを差し引くと、異なり字数としては 61 字の漢字音の転写を回収することができる。これらは経文を音読するために、難読漢字の発音を記したものと考えられる。

北大 D020 の音注は、同じ漢字に対するものであっても 1.29 「塵」chimna、1.30 「塵」jimna のように異なっていることがある。さらに、「恒河」に対する音注が 1.9 では himgä ha' と書かれるが、1.10 では higa ha と書かれ、アヌスヴァーラや鉤形の補助記号が省略して書かれている。また、後述するブラーフミー文字で漢字音を転写した Ch.00120 では、漢字音の f や x などを表すために h とともにヴィサルガ(:)が用いられるが、北大 D020 にはヴィサルガが用いられた例はない。漢字一字一字の発音を

<sup>7</sup> 「淨」の音注には、 の記号がある。1.5 に 1.39 と同じく「清淨」に対する音注があり tsyem tsyem と表記される。Maggi 教授には、書記が「淨」は「清」と同音であることから途中で文字を書くのをやめたのではないかとのコメントを頂いた。しかし、本稿では、この記号は、「淨」と「清」が同音であることを示していると考えたい。

<sup>8</sup> 1.51 には、ブラーフミー文字の音注の一部が残っている。相当する漢文は破損しているが、文字の位置から「辱」に対する音注であると考えられる。ブラーフミー文字の基字の部分は破損しているが、「辱」が日母の漢字であることを考慮し、[š]u'ha と復元する。

精密に転写しようとしたと考えられる Ch.00120 とは異なり、北大 D020 では精密な転写が行われているわけではないようである。

#### 4. 漢字音の特徴

ブラーフミー文字で漢字音が転写された資料としては、スタイン蒐集の敦煌文献 Ch.00120、およびその破損部分を補うペリオ蒐集の P.5597 が知られている。Thomas(1937)により、Ch.00120 は 24 行目以降が『金剛般若波羅蜜経』に相当するとして紹介された。その後、Simon(1957: 335 n.3)によって 24 行目までが『金剛般若波羅蜜経』の啓請文の転写であることが明らかにされた<sup>9</sup>。『金剛経』<sup>10</sup>の漢字音については、水谷(1958)、Csongor(1972)、庄垣内(1986)、高田(1988a,b)、Emmerick & Pulleyblank(1993)による研究がある。また、高田(1988a)では、『金剛経』に見られる漢字音転写だけではなく、コータン語の世俗文書中に見られる漢語語彙に対しても考察を加えている。

北大 D020 の音注は数が限られており、これらに反映される漢字音の体系を検討するのに十分なものであるとは言えない。ここでは、北大 D020 の音注を漢字の声母によって分類し、『金剛経』での表記と比較することで音注に対して考察を加えたい。

また、『金剛経』の漢字音の表記を扱う際には Emmerick & Pulleyblank(1993)では扱っていない Csongor(1972: 39)および Barrett(1996)による漢文の復元箇所(Ch.00120 1.41-42 および 1.51)を含めることで完璧を期した。

以下では、中古音の枠組みで漢字音の表記を検討する<sup>11</sup>。はじめに対音例を示すが、左の欄が北大 D020 に見られる表記であり、右の欄には『金剛経』に見られる表記を示している。漢字の右側に示した数字は当該表記の出現数である。また、全濁声母の漢字に対しては平声の場合に\*を附した。

<sup>9</sup> Ch.00120 の啓請文は、『梁朝傳大士頌金剛経』(『大正新修大蔵経』Vol.85 No.2732)の一部と合致しており、高田(1988a: 85)は Ch.00120 の啓請文を『梁朝傳大士頌金剛経序』とする。しかし、Ch.00120 の 24 行目以下には『梁朝傳大士頌金剛経』に見られる弥勒頌などを含んでいない。また、Csongor(1972: 39)および Barrett(1996)によって復元された経文の注釈は『梁朝傳大士頌金剛経』には存在しないものである。

<sup>10</sup> 以後、便宜的に Ch.00120 および P.5597 を単に『金剛経』と呼ぶ。

<sup>11</sup> 重唇音と軽唇音は別々に扱った。

4.1 唇音

幫母 p-	悲 1 pi'	彼 1 布 6 本 1 不 4 不 9 鉢 2 般 2 八 2 八 1	pi pū piṃnā pi pa parā pa parā parā	邊 1 別 1 報 1 報 1 波 1 波 3 百 2 辟 1 北 1	pyemṇā pye pau pū pa pa pa'hā: pihā: pū pha
滂母 p <sup>h</sup> -		普 1 偏 1	phū phyemṇā	頗 1	pha
並母 b-		比 2 菩*20 菩*21 槃*1	phī phū bhū phamṇā	婆*1 婆*1 白 1 白 2	bha (s)vavā phiha: phehā:
明母 m-	滿 1 廟 1 命 1 蜜 2	蜜 4 蜜 1 滅 2 滅 2	bamṇā byau mem' birā birā mye byerā	藐 4 摩 2 莫 1 名 2	mya ma bahā: mye
非母 f-		福 1 福 2 福 1 非 6 非 5 付 1 不 2 不 1 分 1 發 1 發 5	fvū'.hā': hvū:hā hvū:hā: hvi': hvi: hvū hvi: hvirā hviṃ'.nā hva:rā hva:rā	方 1 方 2 不 1 不 1 不 2 法 1 法 2 法 8 法 3 法 3	hvam hvā: hū: hvū: hvū': hva: hva:rā hva:bā hvabā hva:pā
敷母 f <sup>h</sup> -		敷 1	fvū:		
奉母 v-	奉 2	伏 2 伏 1 復 1 復 1 復 1 復 1 奉 14 佛 1 佛 5	fvū: hvū:hā: fvū'.hā: hvū:hā': hvā:hā: hvāhā hvūṃ:nā hva:ri hvirā	佛 6 佛 1 佛 1 飯 1 筏 1 縛 1 梵 1 凡 1	hvi:rā hvi:ri hvāri hvam:nā hva:rā va hvam:mā hvam:mā
微母 m̥-	微 3 未 1	味 1 微 1 無 18 文 1	vīyi yvī vū vimni	聞 5 萬 1 襪 1 妄 1	viṃnā vaṃnā va(j) vā

北大 D020 においては、幫母は p、明母は b あるいは m、奉母は hv、微母は v で表記される。これらの表記は基本的に『金剛經』と同じである。

明母の b による表記は、当時のいわゆる脱鼻音化を反映している。脱鼻音化においては鼻音韻尾の漢字では声母の鼻音が保持されることが多いことが指摘されており、敦煌資料に見られる漢字音でも当てはまる(羅 1933: 16 など)。北大 D020 では、

鼻音韻尾の「命」 *meṃ* は、*m* によって声母が表記され鼻音が保持されており期待されるとおりであるが、「満」 *baṃṇä* は、鼻音韻尾が表示されるにも関わらず声母は *b* で表記されており特異である。

「奉」 *hvūṃtūṃ* では、*-t* が母音連続を避けるために挿入されている。また、ここでのアヌスヴァーラは母音が鼻音化していることを示している。北大 D020 には「奉」 *hvūṃtūṃ* 以外にも *-t* による類似の表記が見られる。これらの表記については 4.7 でまとめて扱う。

## 4.2 舌音

### 舌頭音

端母 <i>t-</i>	典 1 典 1 典 1	<i>ttiṃ</i> <i>ttiṃṇä</i> <i>ttyiṃna</i>	東 1 諦 1 到 1 多 4 當 1	<i>ttūṃṇä</i> <i>ttyai</i> <i>ttauvä</i> <i>tta</i> <i>ttau</i>	當 2 等 1 得 6 得 1 徳 3	<i>ttā</i> <i>ttiṃgä</i> <i>ttihä:</i> <i>ttihä</i> <i>ttihä:</i>
透母 <i>tʰ-</i>	涕 1 塔 1	<i>thyai</i> <i>thabä</i>	胎 1	<i>thiyi</i>	聽 1	<i>thyai</i>
定母 <i>d-</i>	讀 1	<i>thu</i>	獨 1 同*1 毒 1 地 1 度 3 途*1 第 1 第 1 第 1 提*18	<i>ttū</i> <i>thūṃṇä</i> <i>thūhā:</i> <i>thīyi</i> <i>ttū</i> <i>thū</i> <i>thyai</i> <i>thai</i> <i>thai</i> <i>ttī</i>	提*4 大 1 大 1 大 1 大 2 祖 1 但 1 定 1 定 2	<i>thī</i> <i>thiyi</i> <i>thiyä</i> <i>thayi</i> <i>ttayi</i> <i>damṇä</i> <i>thamṇä</i> <i>thyai</i> <i>thye</i>
泥母 <i>n-</i>	難 1	<i>damṇä</i>	擣 2 擣 2 乃 1 涅 1 曩 1	<i>dūkä</i> <i>dū</i> <i>dayi</i> <i>de</i> <i>na</i>	能 1 男 1 男 1 南 1 念 4	<i>diṃṇä</i> <i>namṇä</i> <i>damṇä</i> <i>namṇä</i> <i>dyeṃṇä</i>
来母 <i>l-</i>	羅 1 離 1 淚 1	<i>la</i> <i>lī</i> <i>lvī</i>	利 4 類 1 來 2 來 11 卵 1 老 1 羅 1	<i>ḍī</i> <i>ḍvī</i> <i>leyi</i> <i>leyä</i> <i>lvamṇä</i> <i>lau</i> <i>(j)rra</i>	羅 7 羅 1 量 7 樂 1 令 1 力 1	<i>la</i> <i>la</i> <i>dā</i> <i>lahä:</i> <i>ḍī</i> <i>ḍikä</i>

北大 D020 においては、端母は *tt*、透母は *th*、定母は *th*、泥母は *d*、来母は *l* で表記される。

来母は『金剛経』では漢字の等位によって表記が異なっており、一等では *l* が、

三等では *ɖ* が用いられる(水谷 1958: 756)。Emmerick & Pulleyblank(1993: 38-39)は、*l* は [l], *ɖ* は [ʎ] を表示しており、*ɖ* の音価はサンスクリットの転写からも確認できるという。北大 D020 の表記では、三等の「涙」は *lvī* と表記され *ɖ* は用いられない。

定母に見られる *th* の表記は当時すでに全濁声母の無声化が起こっていたことを示している。一般的な北方漢語の変化では、全濁声母は仄声においては無声無気音に変化する(藤堂・相原 1985: 242-243)。しかし、北大 D020 では入声の「讀」 *thu* は無声有気音の文字で表記されている。『金剛經』においても声調に関係なく無声有気音の文字によって全濁声母が表記される傾向がある。

また、「難」 *damnä* は明母の「滿」 *bannä* と同様に、鼻音韻尾が表示されているにもかかわらず脱鼻音化している。

### 舌上音

知母 <i>t</i> -		中 1	<i>tūṃ</i>	知 3	<i>tī</i>	
		中 1	<i>tūṃnä</i>	長 1	<i>cā'</i>	
澄母 <i>ɖ</i> -	持*5	<i>chī</i>	重 1	<i>kṣūṃ</i>	住 4	<i>kṣū</i>
	塵*2	<i>chimna</i>	持*4	<i>kṣī'</i>	住 1	<i>cū</i>
	塵*1	<i>jiṃnä</i>	除*1	<i>kṣvyū</i>	長 1	<i>cā'</i>
	重 1	<i>chūṃ</i>	除*1	<i>kṣvū</i>	著 1	<i>cahä:</i>
			住 1	<i>cchū</i>	著 2	<i>kṣa'hä:</i>
			住 5	<i>kṣu</i>	著 1	<i>kṣa'hä':</i>
			住 2	<i>chū</i>		
娘母 <i>ŋ</i> -		女 2	<i>jū</i>			

北大 D020 においては、澄母は *ch* あるいは *j* で表記される。澄母を *j* で表記するのは、「塵」 *jiṃnä* の 1 例だけであるが、同じ「塵」の漢字が 2 か所で *chimna* と表記されることや、「持」がすべて *chī* と表記されることを考えると、例外的であると言える。舌上音においても全濁声母の無声化が起こりつつあったと考えるのが妥当であろう。

北大 D020 では、正歯音三等の昌母 *tɕ<sup>h</sup>*- の「觸」 *chuhä* が、澄母と同じく *ch* で表記されている。漢語の歴史変化を考えると、中古音の舌上音は後に正歯音に合流する(藤堂・相原 1985: 242-243)。この表記は舌上音と正歯音の合流を示唆している。しかし、『金剛經』では澄母は *ch* で表記される例もあるものの、多くが *kṣ* によって表記されており、*ch* で表記される昌母とは区別されている。

4.3 牙音

見母 k-	解 2 驚 1 供 1 今 1	kai' khyütü kūm kiṃ'mä	供 1 恭 1 歸 1 句 3 俱 1 固 1 故 8 孤 1 戒 1 界 1 皆 1 皆 2 皆 1 訖 1 根 2 見 1 見 5 羈 1 堅 1	kūmnä kūm kvi' kvi kyū kūm kū kū keyi ke'yi ka' keyi ke'yi kairä kamnä kyenä kyemnä kviṃ'nä kyemnä	肩 1 教 1 告 1 告 1 告 1 廣 1 剛 17 剛 3 敬 1 竟 1 經 5 國 1 國 1 究 1 給 1 金 18 金 1 今 2	kyemnä katä kautä kau kavä kvam käm kau ke' kye kye kühä: kau kyauvä kīpä kiṃmä kimä kiṃmä
溪母 kh-	泣 1	khi(')bä	空 3 起 1 苦 1 啓 1 啓 1 稽 1 開 1 乞 1	khūmnä khī khū khye kye khī khi'yi khī	乞 1 可 1 可 8 丘 1 丘 1 口 1 口 1	khirä kham kha kyū khyüvä khautä khätä
群母 g-	偈 2	khī'	祇*1 其*5	khī khī	極 1 求*1	khihä: khyüvä
疑母 ŋ-	眼 1 義 1 嚴 1	gam'nä gi' giṃ	樂 1 義 2 語 1 五 3 願 4 言 7 言 1	ha:bhüä hi': gū gū gviṃnä gyamnä gyemnä	岸 1 我 5 我 1 我 3 譏 2 業 2	gamnä ha': gatä ga ga gyehvä:

北大 D020 においては、見母は k、溪母は kh、群母は kh、疑母は g で表記される。これらの表記は基本的に『金剛經』と同じである。

群母に見られる kh の表記は当時すでに全濁声母の無声化が起こっていたことを示している。一般的な北方漢語の発展からは群母去声の「偈」khī'は無声無気音に変化することが期待されるが、無声有気音の文字で表記されている。

「驚」khyütü は他の見母の字と異なり、kh によって声母が表記されている。韻母の表記においても「驚」と同じく梗攝三等に属する「成」sem、「清」tsyem などとは大きく異なっている。転写の際に他の漢字と誤解したためかもしれない。

4.4 齒頭音

精母 ts-	最 1 tcuai	足 1 紫 1 子 2 濟 1 哉 1 哉 1 災 1 災 1	tcyūkā tciysi tci tcī tcayā tciyā tsyeyā tseyi	尊 1 尊 8 作 1 即 3 即 1 則 1 則 1	tcvinā tcūmnā tcahā: tcikā tcī tcihā: tcikā	
清母 ts <sup>h</sup> -	次 1 清 2 趣 1	此 1 此 3 此 1 次 1 次 1 取 1	sitsā tsiysi tciysā tsi tsiysi tsviyi	取 4 切 1 切 1 千 2 請 16 青 1	tsyū tsī tsyai tsimnā tsye tsye	
從母 dz-	前*1 淨 1 盡 1 就*2 從 1 座 1	從*1 在 1 在 1 在 1 盡 1 坐 1	tsyimnā tsyem tsyimnā tsyūtū tsyūm tsva	從*1 在 1 在 1 在 1 盡 1 坐 1	座 2 藏 1 淨 4	tsva tsau tsyai
心母 s-	信 1 信 1 昔 1 脩 1	四 2 四 1 四 2 思 4 須 1 須 17 洗 1 西 1 歲 1 信 3 悉 3 膝 1 薩 19 薩 1 先 1	siysi siysā si si syū sū sī sī svī simnā sirā sirā sarā sattā syemnā	莎 1 相 5 相 9 相 8 相 1 想 4 索 1 脩 1 脩 5 心 1 心 9 三 7 三 1 三 3	svavā syā syau syām syā syā sahā syau syauvā simnā simnā saṃ saṃmā saṃmā	
邪母 z-	隨*1 誦 1	隨*1	svī svī	誦 1	sūm	

北大 D020 においては、精母は tc、清母は ts、從母は ts、心母は s、邪母は s で表記される。これらの表記は基本的に『金剛經』と同じである。

北大 D020 では從母は声調に関係なくすべて ts で表記されている。他の全濁声母においても、北大 D020 ではほとんどが対応する無声有気音の文字で表記されている。水谷(1958: 756-757)は、『金剛經』の tc と ts の対立は漢字音を表記する際には気音の有無の対立を表していたと言っており、北大 D020 の表記もそれに従うものであると言える。

「就」 tsyūtū は「奉」 hvūmtūm などと同様に -t が母音連続を避けるために挿入されている。

## 4.5 正歯音

### 正歯音二等

莊母 tʂ-	莊 1	kšām'				
初母 tʂ <sup>h</sup> -			差 1	cha		
生母 ʂ-	沙 1	ʂʂa	所 1	ʂū	數 1	šū
	數 1	ʂʂū	所 8	šū	生 9	še
			所 1	šuvä	生 11	še
			所 2	šutä	色 2	šaihä:
			所 2	šū	色 1	šaihi:

北大 D020 においては、莊母は kʂ'によって表記される。『金剛經』には莊母の例はない。『金剛經』では kʂ は澄母 ɟ<sub>l</sub>の表記に用いられている。Emmerick & Pulleyblank(1993: 37-38)は、kʂ は[tʂ<sup>h</sup>]を表示すると言う。莊母の kʂ'による表記もそり舌音を意識したものであろう。

北大 D020 においては、生母 ʂ-は ʂʂ で表記される。コータン語の研究により、齒擦音の表記法は古コータン語と新コータン語の間で異なっており、古コータン語では二重文字 ʂʂ が /ʂ/を表し、単独の ʂ は /ʂ/を表すが、新コータン語では単独の ʂ が無声音 /ʂ/を表し、有声音は当該文字の下に鉤形の補助記号をつけて表記することが知られている(熊本 1989: 17)<sup>12</sup>。北大 D020 の音注が書かれたと考えられる 10 世紀には古コータン語の表記法は一般的ではないので、生母に見られる ʂʂ は特異な表記であると言える<sup>13</sup>。

<sup>12</sup> Maggi 教授から同様のコメントを頂いた。

<sup>13</sup> Maggi 教授からは、ʂ や ʂ'で表わされる音とは異なる特異な音を転写するために ʂʂ が用いられたのではないかとのコメントを頂いた。

正齒音三等

章母 tç-		衆 12 衆 2 種 2 囑 1 囑 1 至 3 之 3	cūṃnā cūṃ tūṃnā cukā cūkā cī cī	諸 1 諸 10 眞 3 者 2 者 8 掌 1 章 3	cūṃ cū cīṃnā cavā ca cā cā	
昌母 tç <sup>h</sup> -	處 1 觸 1	sū chuhä	觸 1 處 1 處 4	chūhā: chī chū	處 1 赤 1	cū chihā:
船母 dz-			實 1 實 2 神*1	śī śīrā śiṃnā	食 1 食 2	śihā: śaihā:
書母 ç-	勝 1 深 2	śeṃ śiṃmā	施 6 水 1 世 4 世 1 世 2 世 1 身 5 身 1 說 12	śī śvī śe śiyi śī śī śiṃnā śiṃnā śeverā	說 1 舍 2 捨 1 聖 1 聲 1 聲 1 首 1 收 1 濕 1	śve śa śa śe śai śe śauvā śau śīpā
禪母 z-	尚*1 成*2 受 3 受 1	śāṃtām śeṃ śū śūtū	是 18 時*4 樹 1 善 5 善 5 善 1 善 1 上 2	śī śī śū śiṃnā śamṃnā śe śaṃ śā	尚*1 常*2 城*2 壽 2 壽 3 十 1 十 1 十 1	śā śā śe śau śauvā śaipā śī śihvā:
日母 j-	爾 1 忍 1 辱 1	śī' śiṃna [ś]u'ha	爾 2 二 1 二 2 而 5 汝 4 如 2 如 24 日 1 人 7	śī' śī' śī' śī' śū' śū'tā śū' -j- śiṃ'nā	人 2 然 2 若 2 若 1 若 14 若 2 入 1 入 1	śiṃ'nā śaṃ'nā śa' śa'hi': śa'hā: śa'hā śī'bā śī'pā

北大 D020 においては、昌母は ś あるいは ch、書母および禪母は ś によって表記される。

昌母の「處」の表記は漢字音の歴史変化を考えると chū が期待されるが、北大 D020 では sū と表記されている。

『金剛經』においては、日母は基本的に ś' によって表記される。北大 D020 では、「爾」は『金剛經』と同じく śī' と表記される。また、「辱」[ś]u'ha の音注は、基字は破損しているが鉤形の補助記号を読み取ることができる。日母以外では ś に鉤形の補助記号を付けた例が見られないことを考えると、北大 D020 においても ś' と ś は区別して使用されていたと考えるのが妥当である。「忍」śiṃna では鉤形の補助記

号が書かれていないが、これは北大 D020 の転写が精密なものではないことを示す例と考えるべきであろう。

#### 4.6 喉音

曉母 h-	希 5 況 1 況 1	hī' hvi(ā)' hviā'	虚 1 虚 3 訶 2 訶 1	hyū hyū: hā ha	火 1 化 1 況 1 香 1	hva: hva: hvyūām: hyū
匣母 h-	河*1 河*2 解 1 恒*1 恒*1 恒*1 慧 1	ha ha' hai' higa hiṃga hiṃgā hvyai	斛 1 降*2 降*1 護 2 護 1 解 1 壞 1 還*1 賢*1 賢*1 号 1	hūm ham:nā ham':nā hū: hau': he'yi hva:yi hvaṃ:nā hyim:nā hyem:nā hau':	何*15 何*2 下 2 黄*1 行*1 行*1 行*1 弘*1 後 3 合 1	ha: ha ha: hvā: he': he he': hvūm: hau': ha:pā
影母 ʔ-	畏 1	vūi	擁 1 意 2 意 1 依 1 衣 2 於 1 於 2 於 2 於 6 愛 1 一 1	ūṃnā ī hī': ī ī yū' yū yvī uvū ayā irā	一 1 一 1 一 4 因 1 恩 1 阿 1 阿 3 應 1 應 8 應 2 唵 1	ye yerā ī imnā hem':nā aṃ(nā) aṃ imnā imnā imṃgā āṃṃā
云母			爲 1 爲 2 爲 1 爲 1 謂 1 衛 1 衛 1 云 4 云 1	yvī uvī hvī': gvī gvī yvī uvī yvimnā vimnā	云 3 園 1 右 2 有 1 有 2 有 1 有 4 有 7	yvimnā yvimnā yautā yūvā yauvā yū yautā yau
以母	養 1	yāmtām	欲 1 唯 1 維 1 以 13 已 3 與 1 餘 1	yū yvī yvī yī yī yū yū	喻 1 緣 1 也 3 耶 2 養 1 亦 3	yū yvimnā ya ya yauvā yīhā:

北大 D020 においては、曉母と匣母はともに h あるいは hv で表記される。

『金剛経』の曉母と匣母の表記においては、h あるいは hv とともにヴィサルガが用いられることが多い。一方、北大 D020 ではこれらの声母の表記にヴィサルガが

使用される例はない。

以母は *y* で表記される。この表記は基本的に『金剛經』と同じである。

#### 4.7 まとめ

以上をもとに、北大 D020 の音注とそれに反映される漢字音の特徴をまとめておきたい。

##### 脱鼻音化

脱鼻音化は同時代のチベット文字、ウイグル文字、ソグド文字など他の文字で表記された漢字音でも見ることができ、鼻音韻尾の漢字では鼻音が保持されることが多いことが指摘されている。ブラーフミー文字資料での表記に関しては見解が分かれている。水谷(1958: 756)は、『金剛經』の表記からは鼻音の有無による条件的な区別は見られないと言う。一方で、高田(1988a: 87)は、コータン語の世俗文書中に見られる漢語語彙では鼻音韻尾の文字は *m*、鼻音でないものは *b* と写し、『金剛經』の表記においても梵語音訳字を除けば基本的には鼻音韻尾の有無による条件的区別があると言う。

北大 D020 では、明母 *m*-の「滿」 *baṃṇä*、泥母 *n*-の「難」 *daṃṇä* のように鼻音韻尾の字であっても閉鎖音によって表記される例があり、はっきりとした鼻音韻尾の有無による条件的区別を見ることはできない。

ブラーフミー文字には軟口蓋鼻音を表記する文字 *ṇ* があるが、北大 D020 では疑母 *ŋ*-は *g* で表記され *ṇ* が用いられることはない。この点はチベット文字による資料や、ウイグル文字による資料でも同様である。

##### 全濁声母の無声化

一般的な北方漢語の変化では、全濁声母は平声においては無声有気音に、仄声においては無声無気音に変化する(藤堂・相原 1985: 242-243)。しかし、『金剛經』では、並母 *b*-、定母 *d*-、群母 *g*-は声調に関係なく無声有気音の文字によって表記される。

高田(1988b: 69-76, 107-109)は、チベット文字による資料には全濁声母が声調の区別に関係なく無声有気音に変化しているものがあり、『金剛經』に反映される漢字音も同じ傾向がみられることから、当時そのように全濁声母が発展した方言があったと言う。北大 D020 では、澄母 *ḍ*-の「塵」 *jiṃṇä* の一例を除き一貫して無声有気音の文字によって表記されており、一般的な北方漢語とは異なり『金剛經』の漢字音と似た特徴を示している。

### 正歯音の二等・三等の区別

高田(1988a: 98-99)は、『金剛経』では生母  $\text{ɣ}$ -の表記に  $\text{ś}$  だけではなく  $\text{ʃ}$  が用いられ、船母  $\text{dʒ}$ -、書母  $\text{ɕ}$ -、禪母  $\text{ʒ}$ -の表記には  $\text{ʃ}$  が用いられることがないことから、正歯音の二等と三等は当時区別されていたと言う。

北大 D020 では、生母に見られる  $\text{ʃʃ}$  の表記は、書母や禪母での  $\text{ś}$  による表記と混同されない。また、莊母  $\text{tʃ}$ -は、 $\text{kʃ}$ 'によって表記され、 $\text{ś}$  や  $\text{ch}$  によって表記される昌母  $\text{tʃ}^h$ -とは区別されている。したがって、高田(1988a)の指摘するように当時はまだ正歯音の二等と三等は区別されていたと考えるのが妥当であろう。

チベット文字、ウイグル文字、ソグド文字にはそり舌音を表示する文字がないために、これらの文字で表記された漢字音においては、硬口蓋音の子音とそり舌音の子音の区別は明らかではない(高田 1988b: 49-86, 庄垣内 2003: 60-62, 吉田 1994: 350-348)。一方、ブラーフミー文字にはそり舌音を表示する文字があり、漢字音の転写の際にそれらの文字が使用され、硬口蓋音の子音とそり舌音の子音が区別され表記される。これはブラーフミー文字による漢字音転写の際立って特徴的な点である。

### 韻母の表記について

北大 D020 から回収できる漢字音の転写は韻母の体系を分析するのに十分なものであるとは言えないが、ここでは韻母の表記に関して際立って特異な点を指摘しておきたい。

#### ・ $-\eta$ 韻尾の脱落

一般に敦煌資料に反映される当時の西北方言では、宕摂や梗摂の  $-\eta$  韻尾は脱落する傾向があった(羅 1933: 36-42)。『金剛経』の表記でも同様に宕摂や梗摂の  $-\eta$  韻尾は脱落している。北大 D020 でも宕摂や梗摂の  $-\eta$  韻尾は脱落する。また、高田(1988a: 124-126)は、コータン語の世俗文書に見られる漢語語彙において、通摂の  $-\eta$  韻尾が脱落する傾向があることを指摘している。北大 D020 の表記では、通摂は「供」 $\text{kūm}$ 、「重」 $\text{chūm}$  のようにアヌスヴァーラによって鼻音性が表示されるが、 $-\eta$  韻尾は脱落している。

敦煌資料において  $-\eta$  韻尾が表記されていない場合の韻母の鼻音性については、いくつかの意見がある(高田 1988b: 161-164)。チベット文字、ウイグル文字、ソグド文字では母音の鼻音性を表示することができないため、これらの資料の漢字音転写から、宕摂や梗摂の鼻音性を知ることは困難である。一方、ブラーフミー文字にはアヌスヴァーラによって鼻音性を表示することができる。『金剛経』では、宕摂、梗摂の漢字の表記においてアヌスヴァーラが用いられることは少ない。しかし、北大

D020 では鼻音韻尾ではない漢字の表記にはアヌスヴァーラは 1 例も用いられていないが、「養」 *yāmtām*、「淨」 *tsyem* などのように、入声を除く宕摂、梗摂、通摂の漢字のあわせて 17 字のうち、14 字にアヌスヴァーラが用いられている。これは、宕摂、梗摂、通摂においては-ŋ 韻尾が脱落してはいたが、鼻母音化などによって鼻音性自体は残っていたことを示している。

・止摂開口字の変化

高田(1988b: 129-130)、および Emmerick & Pulleyblank(1993: 45, 48-49)は、『金剛經』では止摂開口字は齒頭音声母と結合する場合にのみ *-iysi*、*-iysä*、*-eysi*、*-i* の表記が見られることから、当時これらの韻母では [i] から [ɨ] への変化が起こっていたと言う。また、庄垣内(2003: 78)はウイグル文字資料においても同様の変化が見られると言う。一方、北大 D020 には、齒頭音声母と結合する止摂開口字の例として、「次」がある。「次」 *tsi* は、他の声母と結合した例と同様に、*-i* によって表記されており、[i] から [ɨ] への変化を観察することはできない。

・入声韻尾

入声韻尾は、チベット文字で記された漢字音では多くが保存されている(高田 1988b ほか)。北大 D020 では「典」 *ttim* のように *-n* 韻尾を表示していない転写も見られるので、入声韻尾の脱落を明確に示しているとは言えないが、「昔」 *syi* や「讀」 *thu* のように入声韻尾が表示されていない転写が見られる。これらは、当時の入声韻尾の弱化傾向を示していると考えられる。

・-tによる長母音の表記

北大 D020 に見られる転写で特徴的なものとして *-t* を用いた韻母の表記がある。Emmerick & Pulleyblank(1993: 42-44)は、『金剛經』に見られる「教」 *katä*、「養」 *yauvä* などの表記に現れる *-t* や *-v* を、漢字韻尾の [w] あるいは漢語の声調の上声と関連付けている。

これに関連して、チベット文字資料では「組」 *dzo'o*、「時」 *shi'i* などのように母音が二重表記される例があり、羅(1933: 66-67)はそれらの多くが上声の漢字であると言う。一方、高田(1988b: 184-185)は、チベット文字に見られる母音の二重表記に対して、ブラーフミー文字資料に見られる *-t* や *-v* による表記に言及した上で、上声との関連を否定しこれらの表記は漢語音節の相対的な長さ由来のものであると言う。

北大 D020 には以下の例が見られる。なお、括弧内は順に『廣韻』における声調、Pulleyblank(1991)による Late Middle Chinese の音価(は上声、`は去声を表す。記号がない場合は平声)である。

尚(平・去 <i>ʃiaŋ</i> )	<i>śāmtām</i>
養(上・去 <i>jian</i> )	<i>yāmtām</i>
受(上 <i>ʃhiw</i> )	<i>śūtū</i>
就(去 <i>tsfiw</i> )	<i>tsyūtū</i>
奉(上 <i>fhjyawŋ</i> / <i>fhəwŋ</i> )	<i>hvūmtūm</i>
驚?(平 <i>kiaŋ</i> )	<i>khyūtū</i>

これらの表記は決して上声に特徴的であるとは言えず、韻尾が[w]でないものも含まれている。また、「受」には、*śūtū* と *sū* の 2 種類の表記が見られ、-t による表記は組織的なものではない。おそらく、高田(1988b: 185)の言うように母音の長さを意識したものであろう。

## 5. おわりに

本稿では、北京大学図書館に所蔵されるブラーフミー文字で漢字に音注を附した漢文経典「北大 D020」について報告し、音注とそれに反映される漢字音に対して考察を加えた。北大 D020 の音注は、場当たりの精密に転写されたものであるとは言えない。しかし、それらに反映される漢字音には他の敦煌出土の漢字音資料にはないユニークな特徴が見られる。これは当時の漢字音を研究する上で貴重な資料と言えるであろう。

## 参考文献

- 熊本裕(1989)「サカ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第2巻: 16-27. 東京: 三省堂.
- 庄垣内正弘(1986)「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」『内陸アジア言語の研究』II: 17-156.
- (2003)『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究 —ウイグル文字表記漢文とウイグル語仏典テキスト—』京都: 京都大学大学院文学研究科.
- 高田時雄(1988a)「コータン文書中の漢語語彙」尾崎雄二郎・平田昌司(編)『漢語史の諸問題』71-128. 京都: 京都大学人文科学研究所.
- (1988b)『敦煌資料による中国語史の研究 —九・十世紀の河西方言—』東京: 創文社.
- (2005)『敦煌・民族・語言』北京: 中華書局.
- 藤堂明保・相原茂(1985)『新訂 中国語概論』東京: 大修館書店.
- 水谷真成(1958)「Brāhmī 文字転写『羅什訳金剛經』の漢字音」『名古屋大学文学部十周年記念論集』749-774.
- 吉田豊(1994)「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報』京都第66冊: 380-271(逆頁).
- 羅常培(1933)『唐五代西北方音』上海: 国立中央研究院歷史語言研究所.
- 周季文・謝後芳(2006)『敦煌吐蕃漢藏対音字彙』北京: 中央民族大学出版社.
- Barrett, T. H. (1996) Review of *A Chinese Text in Central Asian Brahmi Script: New Evidence for the Pronunciation of Late Middle Chinese and Khotanese*, by Ronald E. Emmerick & Edwin G. Pulleyblank. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 59: 595-596.
- Csongor, B. (1972) A Chinese Buddhist Text in Brāhmī Script. *Unicorn (Chi-Lin)* 10: 36-77.
- Emmerick, R. E. and E. G. Pulleyblank (1993) *A Chinese Text in Central Asian Brahmi Script: New Evidence for the Pronunciation of Late Middle Chinese and Khotanese*. Serie Orientale Roma LXIX. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- Pulleyblank, E. G. (1991) *Lexicon of Reconstructed Pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*. Vancouver: UBC Press.

Simon, W. (1957) A Note on Chinese Texts in Tibetan Transcription. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 21: 334-343.

Thomas, F. W. (1937) A Buddhist Chinese Text in Brāhmī Script. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 91: 1-48.

[付記]

本研究は、科学研究費補助金(20・3761)の助成を受けたものである。

The *Diamond Sūtra* as phonetically annotated in Brāhmī script  
—A study of 北大 D020 preserved in the Peking University Library—

TAKEUCHI Yasunori

**Abstract**

北大 D020 is a Dunhuang Chinese manuscript that has been preserved in the Peking University Library. This fragment of the Chinese version of the *Diamond Sūtra* (金剛般若波羅密經: *Vajracchedikā Prajñāpāramitā-sūtra*) includes 95 Chinese characters phonetically annotated in Central Asian Brāhmī script. A facsimile reproduction of this manuscript has been published, but not yet been studied.

The current paper offers a transliteration of the Brāhmī transcriptions with annotations. The author compares the transcriptions with those encountered in another Dunhuang Chinese text, Ch.00120 + P.5597, also transcribed in Brāhmī script. The paper concludes with a discussion of the pronunciation of Chinese characters as reflected in the transcriptions, particularly in the historical context of a northwestern dialect during the late Tang and Five Dynasties.

This analysis demonstrates that the phonetic transcriptions found in 北大 D020 have certain peculiarities not observed in other comparable materials of the period. For example, *zhuāngmǔ* initial (莊母) is transcribed using retroflex letters. It is also noteworthy that the characters of both *dàngshè* (宕攝) and *gěngshè* (梗攝) preserve their nasality as reflected by the transcriptions using *anusvāra*.

( 受領日 2008年6月30日 )  
( 受理日 2008年8月28日 )